

特集 遠山邸の国の重要文化財指定を記念して



主庭より中棟外観

平成 30 年（2018）5 月 18 日に文化審議会が、「旧遠山家住宅」を多様な和風意匠と伝統技術を集成した実業家の邸宅として、重要文化財（建造物）に指定することを文部科学大臣に答申し、8 月 17 日の官報告示を経て、正式に国の重要文化財になりました。

遠山元一創設の遠山記念館は昭和 43 年（1968）に財団法人の認可を受け、45 年から一般公開を始めました。財団設立趣意書の中に「今日貴重になった純粋な日本建

築の永久保存を図る」とあり、建物の洗練された意匠と職人技術の粋を結集する建築的価値と希少性を自ら認めて、長く保存をしながら文化の向上に役立てたいと決断したわけです。それ以来 48 年間、大勢の方々に遠山邸の爽やかな建築美を楽しんでいただいています。

この度、国の重要文化財に指定されましたことはこの上なく喜ばしく、遠山記念館の新たなるスタートにいたしたいと思います。

文化庁による重要文化財指定の説明文は詳細であるため、5月18日夕刻の報道発表用の短い説明を引用して紹介をいたします。

旧遠山家住宅は、埼玉県中部の田園地帯に所在する。日興証券創立者の遠山元一が郷里に建てた邸宅で、昭和11年までに住居部分が竣工し、その後、茶室などが整備された。

東棟は茅葺の大型建築で、豪農であった生家の風情を受け継ぎつつ豪壮で格調高い形式と意匠をもつ。2階建ての中棟は、1階に端正な意匠の接客用座敷、2階に洋風の応接室や寢室を設ける。西棟は隠居所で、数寄屋を基調とした瀟洒な座敷や仏間などからなる。いずれも多様で吟味された良材が使用されており、卓越した建築技術を駆使して建築された、極めて質の高い近代和風建築として価値が高い。

○指定基準＝意匠的に優秀なもの

以上のように評価されました。近代和風建築の昭和の建造物としては6件目、埼玉県では最初の指定になります。これまで遠山邸の保存と維持、その活用に努力をしていますが、重要文化財の指定を受けたこれからは、日本国民の貴重な文化財を管理するという自覚と責任をもって、最善を尽したいと存じます。

さて、文化財指定を受けるのに先立ち、平成23年から行ってきた遠山邸に関する調査と、講演会で新知見を広める遠山邸研究会の活動の集大成として、平成28年に外部の建築研究者による専門調査を実施しました。京都大学名誉教授 宗本順三氏、京都工芸繊維大学准教授 矢ヶ崎善太郎氏、京都精華大学特別研究員 小出祐子氏、直井陽子調査員、庭園研究の東京農業大学准教授 栗野隆氏に依頼をして、遠山邸の現況を隅々にわたって実測調査し、図面を起こすことから始めました。さらに、遠山家の歴史と残されている創建時の建築設計青焼図面などの関係資料を分析し、当初の構想と現在の建物が完成するまでの過程、そしてこの建築と庭園の文化財としての特性と価値を、報告書としてまとめていただきました。

タイトルを『遠山記念館（旧遠山家住宅）建築調査報告書』とし、図版24頁、本論95頁、実測図面47頁に及ぶ報告書が平成30年3月1日に完成しました。文化庁を始め建築関係機関、研究者に贈呈いたしました。一般には頒布はしておりませんので、

「結章 旧遠山家住宅の建築的価値」をここに転載いたします（建設経緯部分は省略）。

主屋は大規模であるが、東棟、中棟、西棟に分割し、それぞれに異なる機能を持たせ、機能に応じて東棟は「関東地方豪農の趣」、中棟は「二階建て東京風の建築」西棟は「京間風の数寄屋づくり」として様式に差異をもたせている、さらに、当時の流行でもあったアール・デコ風の意匠をまとった洋間を違和感なく見事に融合させている。

建物に使用されている、全国から集められた多様な良材は、現在では入手困難なものばかりであり、それらが適所に用いられている。

施主の発想に基づいた、3つの異なる様式をつなげるという発想は、きわめて独創的である。それらを破たんすることなくまとめあげている点において設計者・室岡惣七の豊かな感性と高い力量がうかがえる。近代の建築家にふさわしい独創的で意欲的な和風建築であるといえる。伝統と近代性が見事に融和しており、関東という地域性と、時代の流行をも取り入れた柔軟な設計術が見て取れる。

随所に発揮されている大工をはじめとした職方の技には、きわめて高い力量が発揮されており、意欲的な近代和風建築の造営に取り組む職方たちの、入念で真摯な姿勢がうかがえる。

旧遠山家住宅の建築は関東地域という地域性もち、普遍性と個性をあわせもち、伝統の近代性を見事に融和した、戦前期の近代和風建築として記念碑的な遺構であるといえる。保存状態も良好であり、今後の維持継承をはかるための体制も十分に整っている。

さらに、施主である遠山元一、総監督であった遠山芳雄、設計者・室岡惣七、大工棟梁の中村清次郎たちによって構想され、いく度かの設計変更を経て現在の建物が完成するまでの過程があきらかになる豊富な史料が良好な状態で現存していることも、旧遠山家住宅の建築の歴史的、文化的価値をいっそう高めている。

（宗本、矢ヶ崎、小出）

以上を参考にして、遠山邸をじっくりとご覧いただきたいと思います。

理想の和風建築を建てる - 遠山元一・芳雄が求めた住まいの形 -

久保木 彰一



遠山邸は日興証券(現SMBC日興証券)の創業者遠山元一が、生家のあった埼玉県比企郡三保谷村に、昭和11年(1936)に建てた和風建築である。東京から一流の大工左官ら職人を呼び寄せ、全国から集めた銘木を使って建てられた。敷地は3,000坪、建物は主屋だけでも総建坪212坪、主な部屋数は14室の邸宅である。まだ大きさをイメージできないのであれば、畳の枚数が計250枚、畳廊下の延長100m、雨戸170枚、照明の電球100個といった感じだ。

個人邸でこれだけの建築規模になったのは、16歳で東京へ出されて証券界に入ってから以来、元一がずっと思い続けてきた生家再興の願いが並外れて大きかったことと、自らも図面を引いて家の設計をするうちに、知り合いからの勧めもあって次第に大きくなってしまったためという。再興を象徴する豪農風の東棟、書院造りの大広間のある接客対応の中棟、母のための数寄屋座敷の西棟と、それぞれの使用目的、性格に対応する和風3様式に従って建設し、渡り廊下で連結している。違う好みの家を増築追加してなったわけではなく、初めからのプランであったところがユニークである。しかも、正統な書院造り、数寄屋造りの形式は守りながら、古風なスタイルをそ

のまま継承するのではなく、昭和初期のモダンな感覚によって解釈をして、今日の和風住宅に通じる雰囲気をつくる座敷も見られる。建物内外を歩き、どこを見ても、築後82年を経た家とはとても思われたいのは、状態が良いことばかりでなく、この都会風に洗練された意匠と、家具を目立たせない生活スタイルによるからであろう。

各部屋を一つひとつ見て行きたいが紙面に限りがあるので、一部屋だけを案内して、こうした家のスタイルを誰が考え出したのかを大胆に探してみたい。

大邸宅の中程に南面する18畳の大広間(上図版)は、一番格式のある座敷で、賓客を接待するとともに、家の行事や冠婚葬祭などを執り行うための重要な部屋である。武家建築の書院造りの形を踏襲するが、遠山家は豪農の出身であるから角の床柱はやめて、穏やかな天然絞りの北山杉磨き丸太を床柱にする。他の近代豪邸に見かけるような、珍奇な床柱には絶対にしない。右側床脇も違棚ちがひだねは設けずに、驚くほどに緻密な木目が映える檜ひのきの珠杵板たまもくを嵌めた地袋だけとしている。一目で忘れられなくなるような強い印象度はないものの、端正で嫌味のないすっきりとした床の間の意匠ができあがる。このような抑制

の効いた品格ある意匠が座敷全体に、さらに邸宅のすべてに渡って展開する。そして、豪農風の東棟から、接客の中棟、数寄屋造りの西棟へと、心地よい意匠変化が楽しめるように綿密に設計されていることが、この邸宅建築の最大の特色といえよう。

大広間の特別な仕様を列挙すると、壁は栝榴石(ガーネット)を砕いた本震壁という砂壁で、棹縁天井は2尺巾・長さ3間の春日杉糸柱板8枚張り、隣10畳次の間と区別するために回縁は3段にする。奥行き4尺・巾1間半の床には備後中継ぎ表の龍鬢畳を



入れる特別の床畳。大広間、次の間の東南西の三方に入側畳廊下を回す。若松を描いた金泥砂子散らしの襖障子など、建具もすべて極上の特注品となる。

床の間の飾りとして、名画や由緒の道具を用意するのは当然だが、床柱を背にして坐れば眼前に、松や溪流の庭がぐるりと見渡せる。ここからの眺めも忘れてはならない。来客へのもてなしばかりでなく家族にとっても、この景色は楽しみであったろう。梅から始まる季節ごとの庭の風情をパノラマに味わえるように、アメリカ製の歪みのない大型ガラスを輸入して掃き出しガラス戸に仕立て、広角の眺望といっぱいの採光を手に入れた。冬でも陽射しがあれば入側縁は、さながら温室のようである。

主人の仕事上の理由から、接客のために設えたこの大広間には、実際に戦前戦後を通して政財界の賓客を迎えている。東京から遠路をいとわず到来された客は、水田地帯に忽然と現れた濠を廻らす館のような邸宅に驚き、内部で展開する鄙には稀なる部屋の室札に感心されたに違いない。そして、都会の喧騒から隔絶するのどかな田舎での一時を楽しまれたであろう。仕事上の交渉ごとがスムーズに進めば、大広間の役割は完全に達成されたことになる。

洋風建築が専門でガラスの調達や耐震設計を始め、現場監督を担当した設計士の室岡惣七と、民家・書院・数寄屋のすべての技巧に精通した大工棟梁の中村清次郎が指揮をして、施主の思いをしっかりと形にしたわけだが、ここにもう一人の人物が総監督と

して関わった。元一の6歳下の弟・芳雄で、会社運営が多忙のために東京を離れられない兄から、現場での一切の決定を委ねられた。

後に元一は『愛弟芳雄のこと』と題した一文で「部屋部屋の間の取りの工合いから、庭の一木一草に至るまで、芳雄のあたたかいところづくしと、行き届いた工夫や努力のあとが偲ばれる。この建築こそ、彼の生涯から残されたたった一つの事業であり、また、なにごととも忘れて打ち込むことができた彼の芸術品であったといえる」と書いている(実は、芳雄は昭和14年に中国視察中に遭難し、20年まで生き延びたが、帰国の望みは叶えられなかった)。

彼の芸術品だと言い切る表現は誇張ではない。建築のプロではない芳雄であったが、茅葺きの難渋時に自ら屋根に上がって、こうするのだとやって見せた逸話もあることから、元一の身びいきの評とは思われない。材料の調達も芳雄と中村棟梁が行い、東京木場は勿論のこと、木曾檜は名古屋の材木商、数寄屋材は大阪の銘木商を回って、余剰が出るほどに買い付けてきた。資金はすべて兄が出す訳で、これぞという銘木を見つけたら迷うことなく入手したのであろう。壮大な建築を創るといふ、しかもやりたいうようにできる場を与えられた芳雄は、自らの能力を思う存分に発揮した。生来の器用人で、見ているだけで要領を覚え、道具などをこしらえる特技もあったというから、家造りは楽しくてたまらなかったのではなかったか。銘木捜しに出かければ、ついでに名建築の探索と学習も怠らなかつたはずである。

こうして、芳雄と中村棟梁、室岡設計士の3名が、互いを信頼して見事なタッグを組み、元一・芳雄兄弟が思い描く理想の住まいを現実の形にしていっていった。元一の場合、この本宅から東京兜町の会社へは遠すぎるため、東京麻布の家に住む。自分と家族が住むためではない理想の本宅造りを始め、苦勞を重ねた母が余生を送るための家としての設備には注文をつけた。芳雄も、家長の兄の家であるとはいえ、江戸時代から続く名家の再興を証明する建物は、どんな形にすべきかを思案したであろう。思い出のある茅葺き屋根で囲炉裏の部屋を一部に設けたいが、近ごろ流行の田舎家の移築や再現にはしたくない。垢抜けた雰囲気になりたい。兄から指示のあった接客用の座敷や、母が暮らす部屋の数寄屋意匠も、伝統は守りながら都会風のすっきりとしたものにしよう。洋間の応接室も必要かもしれない。すべてに最新の生活設備を導入して、時代を先取りするような和風建築を建てるのだ、と。

ところで、明治時代以降、茶の湯を愛した政財界人の中には、好みの邸宅や茶室作りに限らない情熱を注ぐ人達がいた。山形有朋、井上馨、西園寺公望、益田孝、原富太郎などは、普請道楽という言葉があるように、建築空間を造る道理をつかんで楽しむ、そこに自らの価値観と人間性を表現することができ

た数寄者たちであった。遠山元一、芳雄兄弟は茶道を嗜むことはなかったので数寄者ではないが、2人の建築美についてのこだわり方は、先人達と変わらぬものがあった。自分がこれから家族と暮らしていくための家づくりではなく、最高のスタッフと極上の材料を自由に使って、夢のような理想の建築作品を作りあげる。元一は戦争に向かう時代の流れを読んで好機を逸することなくその準備を整え、芳雄は兄から与えられたチャンスを見事に結実させたのである。

考えてみれば、戦前に庶民が家を建てるとすれば、近隣で評判の大工を探して、和風の家をしたい、玄関を入った隣に洋間の応接室を設けてほしいと伝え、間取りと費用の打ち合わせをすれば、後は大工に任せるとするのが普通であった。図面などなくとも施主の希望の家ができた。こうした庶民スタイルとは正反対の方式をとったのが遠山邸で、施主の親族が現場の総監督となり、判断が必要な際にはその場で直ちに結論をだす。2年7か月の工事期間中、東京から帰ってきた遠山芳雄が工事を見守り、指揮をしたわけだ。施主の思いや好みは建築の隅から庭の端々に及ぶまで完璧に行きわたる。そうした幸運の形がそのままに、今日まで続いているのが遠山邸である。

遠山邸関係年譜

昭和	8. 9/26	遠山邸着工
	10.10/ 5	本宅新築感謝会キリスト教ミサ
	11. 4/25	遠山邸竣工
	9~10	新築披露会、新築記念園遊会
	14	弟遠山芳雄、中国で遭難
	23.11/12	母遠山美以、本宅で死去
	45. 5/10	財団法人遠山記念館として邸宅の公開が始まる
	47. 8/ 9	遠山元一死去
平成	11.11/ 5	遠山邸研究会 講演会始まる
	12. 2/15	旧遠山家住宅登録文化財となる
	26. 7/27	百年名家で放映される
	27. 9/27~	埼玉県近代和風建築総合調査
	28. 2~12	財団独自の建築調査を実施
	29. 3/31	『埼玉県の近代和風建築 - 埼玉県近代和風建築総合調査報告書』刊行
	30. 3/ 7	『遠山記念館 (旧遠山家住宅) 調査報告書』完成
	4/29	文化審議会文化財分科会の諮問
	5/18	文部科学大臣に答申される
	8/17	官報告示により重要文化財指定

付録

本宅の建設工事にかかわった人々の一覧と、邸宅に使用した用材の細目を『遠山家本宅新築落成記念写真帳』より抜粋して掲載する。

建設地 埼玉県比企郡三保谷村大字白井沼812番地
(旧地番)

着手 昭和 8年9月26日

竣工 昭和 11年4月25日

建設関係者一覧

総監督	遠山芳雄
設計監督	室岡惣七
大工棟梁	中村清次郎
同副棟梁	涌井一衛
鳶	木本千松 (古小山直隆代)
木挽	太田勝久
屋根茅葺	遠山熊造 (三保谷村)
瓦葺	川崎英之
左官	馬路喜三郎
建具	藤井茂
襖	清水鐵太郎
畳	藤本善雄
銅工	上原正三郎
石工	田崎徳次郎
鉄筋鉄骨	大島信義
電気	小林紀代磨
衛生	富澤重夫
庭師	龍見清吉
和風家具	前田南齊
洋風家具	高島屋装飾部
鑿井	日本鑿泉合資会社
運搬	河西自動車部
木材檜	服部材木店 (名古屋)
丸太	北山丸太株式会社 (京都府)
松、杉	井上竹吉 (入間川)
	金子和三郎
銘木、樺	大政材木店 (大阪)
	篠田政之助
	中文東京支店
桐	桐治本店
土蔵鉄扉	吉川商店

(無記名者東京)

使用用材の一覧

長屋門	用材	: 全部檜
	瓦	: 西京瓦
	壁	: 大津黒本磨
	敷石	: 花崗石
	左右堀	: 鉄筋コンクリート造
	壁	: 漆喰薄卵色仕上
東棟表玄関	用材	: 檜
	天井	: 檜玉杓格天井 (右図版)
	屋根	: 茅葺厚3尺
	廂	: 銅板葺
	敷石	: 桜花崗石
	沓脱	: 鞍馬石
東棟広間	用材	: 檜及松
	壁	: 稻荷土本磨
	畳	: 琉球表無縁
広間小屋組	用材	: 松
	小屋	: 与次郎束組
中棟外正面	用材	: 尾州檜
	瓦	: 三州極上品
	壁	: 卵漆喰
	廂	: 銅板葺
中棟1階大広間	用材	: 尾州檜
	床柱	: 北山杉絞丸太
	床框	: 蠟色艶消塗
	落掛	: 桐桁
	床脇	: 地板及棚板檜玉杓
	書院	: 棚板檜玉杓 欄間桐桁七宝彫透 障子桑製
	天井	: 春日杉桁巾2尺
	畳	: 備後表紺縁付特製品
	壁	: 本霞 (柘榴石)
	欄間	: 桐箆欄間
	襖	: 烏子金泥腰模様
中棟大広間縁	障子	: 檜製蠟色艶消塗縁
	硝子戸	: 檜製本磨面取硝子入
	壁	: 本霞
中棟2階客間	柱	: 北山杉丸太面皮
	床柱	: 桐四方桁
	床框	: 面皮 蠟色艶消塗
	落掛	: 桐桁
	床脇	: 地板及棚板桑玉杓 窓障子錆竹兜巾組 書院障子錆竹節なし三方貼付
	天井	: 春日杉杓板極上品
	壁	: 稻荷聚楽
	地板棚板	: 桑玉杓
	南天井	: 春日杉桁巾2尺及桐網代組
中棟2階応接室	床	: 寄木張
	天井	: 春日杉上杓巾3尺長9尺

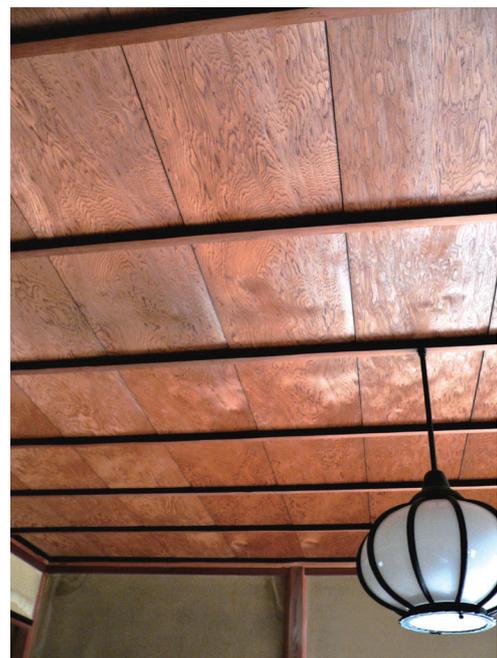


表玄関の格天井に張られる檜の玉杓の板は、54cm正
方の板36枚を用いる。泡模様の杓はすべて異なる。

	壁	: 駱駝色真綿壁
	床柱	: 桑上杓
	床框	: 床板床脇棚板共檜玉杓
	落掛	: 赤松
	欄間	: 檜材唐草彫透オパール硝子入
	寝室境戸	: 桐巾4尺厚1寸5分1枚物 中央彫刻銀象牙 鼈甲等の象眼
	同欄間	: 桐桁二重菱唐草彫透 オパール硝子入
中棟2階寝室	床	: 寄木張
	天井	: 春日杉桁巾1尺5寸
	壁	: 装地張
中棟2階4畳半	柱	: 杉面皮
	天井	: 神代杉杓
	雑作	: 杉赤桁
	床柱	: 北山杉絞丸太
	落掛	: 桐桁
	床棚	: 楠玉杓
	床脇	: 棚板桑上杓 窓障子面取2重蜀江組
	壁	: 墨入稻荷
中棟2階洗面所	用材	: 北山杉丸太
	壁	: 九條土
中棟1階化粧室	柱	: 杉あて丸太
	天井	: 鞍馬杉巾1尺長9尺玉杓
	地板	: 棚板共楓杓
	窓下	: 神代杉薩摩杉及桐桁張交
	壁	: 錆本磨
中棟1階浴室	用材	: 尾州檜
	床及腰壁	: タイル張
	壁	: 漆喰水色本磨
	窓	: 硝子戸硝子無双付
中棟1階便所	用材	: 檜及北山杉丸太

棚板 : 大便所床板共楠
 壁 : 稻荷紅差本磨
 中棟外壁(西棟への渡廊下一部)
 用材 : 檜
 西棟玄関 柱 : 北山杉面皮
 雑作 : 赤松
 壁 : 錆聚楽
 土間 : 那智黒石埋込
 障子 : 腰板目杉洗出網代
 西棟老人室(12畳)
 柱 : 北山杉面皮
 床柱 : 北山杉絞丸太
 床框 : 赤松蠟色艶消塗
 落掛 : 桐柁
 雑作 : 赤松
 書院窓 : 棚板松上柁 障子面々皮貼溜塗
 袖板 : 桐柁
 天井 : 薩摩極上柁廻縁竿縁北山杉面皮呂色塗(右下図版)
 壁 : 稻荷聚楽
 下天井 : 春日杉上柁巾3尺長12尺1枚張
 欄間 : 桐空板桐彫透
 襖 : 鳥子菊花金砂子腰模様
 西棟仏間(6畳) 柱 : 北山杉面皮
 天井 : 春日杉空板
 雑作 : 赤松
 壁 : 稻荷土
 棚板 : 桑 火灯口桑 幕板桐地金砂子
 襖 : 鳥子鳳凰金砂子総模様
 仏間内部 須弥壇 : 桑及唐白檀
 天井 : 格天井極彩色
 羽目板 : 桐柁
 西棟便所 壁 : 紅差本磨
 西棟茶間(7畳) 柱 : 北山杉面皮
 床柱 : 赤松皮付丸太
 落掛 : 赤松
 地板 : 松
 天井 : 春日杉空板及薩摩杉空板
 廻縁辛夷 竿縁赤松皮付
 壁 : 墨差天王寺
 茶間前土間縁 天井 : 北山杉丸太 化粧屋根裏
 軒内下地窓 下地材南天
 床 : 敷瓦
 硝子戸 : 框赤松 腰錫及鉛の露草象
 眼硝子面取本磨
 客間前濡縁 用材 : 栗 名栗付
 屋根裏 : 極あて丸太 薩摩芦
 蹲 : 鞍馬自然石
 杵脱 : 鞍馬石
 西棟客間(8.5畳) 柱 : 北山杉面皮

天井 : 杉上柁巾1尺2寸 長12尺
 網代北山杉磨肌
 雑作 : 赤松
 床柱 : 北山杉絞丸太
 床框 : 杉あて丸太上端蠟色艶消塗
 落掛 : 京都産錆竹 床間及下天井桐空板1枚張
 壁 : 大坂錆
 西棟水屋 柱 : 北山杉面皮
 壁 : 九條土
 西棟廊下 壁 : 聚楽
 渡廊下 床板 : 檜
 壁 : 浅黄土本磨
 西棟控室(3畳) 壁 : 金崗砂
 西棟土間便所 壁 : 京浅黄土錆出
 西棟東南面 用材 : 北山杉面皮
 瓦 : 西京瓦
 壁 : 錆聚楽錆出
 廂 : 銅板一寸五分足葺
 杵脱及飛石 : 鞍馬石
 蹲 : 棗形伊勢花崗石
 灯籠 : 春日形関西花崗石
 裏門 柱 : 北山杉丸太
 雑作 : 赤松
 屋根 : 西京瓦 腰葺杉皮5分足
 壁 : 錆聚楽錆出
 中庭門 柱 : 栗名栗付
 垂 : 辛夷及北山杉丸太
 屋根 : 杉皮葺足5分
 左右塀 : 檜材 京瓦 壁錆聚楽錆出
 扉櫃鹽地洗出 杉皮網代張



西棟12畳間の天井板。この薩摩杉の表記にだけ、極上と等級が記されている。

2018年 後期 展覧会

コレクション名品選3

遠山邸の調度と漆器

10月23日(火)～12月9日(日)

当館創設者である遠山元一は、遠山邸の調度品として、さまざまな調度や工芸品を蒐集いたしました。その中には現在重要文化財に指定されている中世蒔絵の名作「秋野蒔絵手箱」、豊臣秀吉の献上品を精巧に写したとされる「蔦細道蒔絵文台・硯箱」など、美術史上極めて価値の高い作品も含まれます。また元一は昭和11年の遠山邸竣工に際し、当時の東京を代表する指物師であった前田南斉に、30点近くの調度品を発注しています。この南斉をはじめ、同時代の工芸家の優れた作品も、遠山コレクションの重要な構成要素となっています。美術館リニューアル後のコレクション名品選の3弾として、これら漆器の名品を含む調度品を一堂に会して展示いたします。



秋野蒔絵手箱 鎌倉時代(重要文化財)



田付長兵衛 蔦細道蒔絵文台・硯箱 江戸時代



雲鳳螺鈿高坏 琉球王朝時代



前田南斉 花菱透彫桐書棚 昭和11年



前田南斉 鶴縫嵌入桐杳乱箱 昭和11年

これからの展示・催し物

●レトロな空間で、ノスタルジックな音楽を 手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会 Part 23

日時：11月3日(土・祝) 午後1:30～2:30
場所：遠山邸中棟大広間 定員：50名(先着順)
参加費：入館料のみ

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、SPレコードの鑑賞会 Part23を行います。SPレコードは、かつて音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。

しかしながら、SPレコードでしか聴くことのできない演奏があります。貴重な記録の中から、クラシック曲や童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受け付けます。



秋の
催し物

コレクション名品選4

琳派と雛

2019年2月9日(土)～3月17日(日)

琳派と雛のコラボレーション。17世紀、俵屋宗達に始まり、尾形光琳・乾山などを中心に京都で発展した琳派は、19世紀になると江戸の酒井抱一らが、その作風を継承していきました。また18世紀に入って雛飾りが盛んになると、雛の文化は、享保雛や次郎左衛門雛、また江戸オリジナルの古今雛など、様々な姿の雛人形を生み出してきました。いずれも京都で誕生発展し、やがて江戸にもたらされた雅び、あるいは粋と称される華やかな芸術・文化といえます。

今回は① 京の琳派と雛

② 江戸の琳派と雛

③ 近代以降の琳派と雛

という展示構成で、所蔵の琳派作品を雛人形と同時に展示致します。同一空間の中、お互いがどのように響きあうか、ぜひご期待下さい。

併せて会期中、遠山邸の大広間では、十畳の座敷いっぱい飾られた雛壇飾りもご覧いただけます。



尾形光琳 虎溪三笑図 江戸時代中期



野々宮時絵硯箱 江戸時代後期



池田孤邨 百合図 江戸時代後期



享保雛 江戸時代中～後期



白縮緬地燕子花模様染単衣 昭和時代



遠山家雛壇飾り 大正時代

● 「琳派と雛」展ガイドツアー

- 2019年2月23日(土) 「琳派の日」 午後1:30～3:00
担当学芸員が、美術館に展示されている琳派作品を中心に解説、その後、遠山邸をご案内致します。
- 2019年3月2日(土) 「雛の日」 午後1:30～3:00
担当学芸員が、美術館に展示されている雛人形を中心に解説、その後、遠山邸をご案内致します。

これからの展示・催し物

●「親子で楽しむワークショップ&ギャラリートーク」

— 投扇興遊びと子どものための展示解説 — 共催 川島町教育委員会「地域子ども教室」

せんすを投げて的にあてる、昔のゲーム「投扇興遊び」に挑戦してみませんか。またその後は、遠山邸に飾られた遠山家のおひな様や美術館で開催中の「琳派と雛」展を見学します。

日時：2019年2月9日(土) 午後1:45～3:45
2月10日(日) 午前10:00～12:00

参加費：不要

参加対象：小学生(入場無料)と保護者です。
お子様だけの参加も可能です。

お申込み：電話もしくはメールで 2019年1月8日(火)より
予約を受付けます。

TEL 049-297-0007 メール arai@e-kinenkan.com



●「遠山記念館 雛祭りの茶会」

第3回「遠山記念館 雛祭りの茶会」を開催いたします。普段は公開されていない遠山邸中棟2階の数寄屋座敷をつかった、雛まつりにちなんだ趣向のお茶会です。今回は改元を記念し、皇室に関連した貴重な道具をお出しする予定です。2階には数寄屋座敷の他に、洋間の応接室と寝室がもうけられており、呈茶の後にこちらのお部屋もご見学いただけます。皆様のご参加をお待ちしております。

日時：2019年3月3日(日)

午前11:00～(第1席)

午前11:40～(第2席)

午後1:00～(第3席)

午後1:40～(第4席)

午後2:20～(第5席)

午後3:00～(第6席)

各回とも20名様

会場：遠山邸中棟2階 数寄屋座敷

席料：入館料とは別途、お一人様 1,000円

主催：公益財団法人 遠山記念館

担当：依田徹(当館学芸課長)

お申込み：電話もしくはメールで 2019年1月8日(火)より予約を受付けます。

TEL 049-297-0007 メール tkkk@e-kinenkan.com

定員に満たなかった場合は、当日のご参加も受付けます。



遠山邸 中棟2階 座敷

----- 2017年度 新収蔵品 -----

(右) 竹岡雄二「立っている彫刻Ⅱ」1989

竹岡雄二様(ドイツ、デュッセルドルフ)より、2016年の「竹岡雄二
台座から空間へ」の出品作品をご寄贈いただきました。

(左) 田付高廣「鉄拐仙人蒔絵硯箱」江戸時代中期

当館所蔵「葛細道蒔絵文台・硯箱」の
作者である田付長兵衛と同じ一族の作
品と推定されます。



2017年度 催事報告

2017年	4月15日	遠山邸研究会 矢ヶ崎善太郎氏講演会「遠山邸の技と意匠」
	5月3日	手廻し蓄音機によるSPレコード鑑賞会
	5月27日	お座敷美術講座「涼感を誘う、長板中形」
	11月3日	手廻し蓄音機によるSPレコード鑑賞会
2018年	2月3日・18日	親子で楽しむワークショップ&ギャラリートーク (共催 川島町教育委員会「地域子ども教室」)
		投扇興を楽しむ会 毎月1回 開催

「遠山記念館 友の会」入会のご案内

「遠山記念館 友の会」は、遠山記念館を何度も訪れたいという方や、邸宅・庭園および美術館の活動やイベントに積極的に参加したいという方のための集まりです。皆様のご入会を待ちしております。

- 会員特典**
1. 会員証の提示により、同伴者1名様まで一年間何度でも無料でご入館いただけます。
 2. 展覧会やイベントなどを掲載した「遠山記念館だより」をご送付いたします。
 3. 次の有料イベントへのご参加が無料となります。
 - ・建築の専門家による講演会「遠山邸研究会」
 - ・当館コレクションについて外部研究者にお話をいただく「講演会」
 - ・当館学芸員の研究テーマをわかりやすく解説する「土曜講座」
 - ・遠山邸の座敷にて、当館コレクションを直にご覧いただく「お座敷美術講座」
 4. 当館主催のお茶会(雛祭りの茶会、端午の節句茶会等)の席料が半額となります。
 5. 当館の出版物、ミュージアムグッズを2割引でお求めいただけます。

年会費：3,000円 有効期間：入会日より1年

申し込み方法

同封の入会申込書に必要事項をご明記の上、遠山記念館までご郵送、もしくはFAXをお送りいただくと共に、郵便局に置いてある払込取扱票(赤い用紙)に、住所・氏名・電話番号、また下記の情報をご記入の上、年会費3,000円の払い込みをお願い致します。

加入者名：公益財団法人 遠山記念館 口座記号番号：00220-8-139246 金額：3,000円

ご入金の確認後、追って会員証を送付いたします。会費の領収は会員証の送付を以て代えさせていただきます。ご利用の有無に拘らず、会費の払い戻しはいたしません。

送り先：〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675 公益財団法人 遠山記念館 担当 松村
TEL 049-297-0007 FAX 049-297-6951

2018年後期 遠山邸2階 特別公開日

9月23日(日)・10月27(土)・11月23日(金・祝)
午前11:00～午後3:00

遠山邸2階の和洋折衷の洋間応接室、寝室、及び12畳間座敷の特別公開を、上記の日程で行います。まだ、ご覧になっていない方は是非ご参加ください。

アールデコの照明具や、オパールガラスが作り出す昭和モダンのデザインと、伝統和風建築の意匠が違和感なく融合されていて、上品で独特の雰囲気を感じられます。2度目、3度目の方も、気付かなかった新しい発見があるかもしれません。



「旧遠山家住宅 重要文化財指定 記念シンポジウム」のお知らせ

当遠山記念館だより冒頭で報告をいたしましたように、遠山邸(旧遠山家住宅)が国指定の重要文化財となりました。これを機会に、さらに多くの方々に近代和風建築を代表する遠山邸の奥深い魅力を知っていただくため、美術、建築専門家による講演会と討議の会を開催いたします。

日時：2019年4月28日(日) 午後1:30～4:40

場所：ウェスタ川越多目的ホール(川越市新宿町1-17-17)

人数：200名(申込不要)

参加費：無料

講演：高階秀爾氏(大原美術館館長・東京大学名誉教授)

矢ヶ崎善太郎氏(京都工芸繊維大学准教授・遠山邸建築調査委員)

小出祐子氏(京都精華大学特別研究員・遠山邸建築調査委員)

討議参加：宗本順三氏(京都大学名誉教授・遠山邸建築調査委員長)

遠山公一 当遠山記念館理事長

旧遠山家住宅バスツアー：当日の午前中に行う予定です(川越駅集合)。

詳細については、講演タイトルとともに遠山記念館のホームページでお知らせいたします。

利用案内

◇入館料

期間	一般	学生
コレクション名品選	700円	500円
美術館 休館中	500円	300円

◇開館 午前10:00～午後4:30
(入館は午後4:00まで)

◇全館休館 月曜日
(9月17日、9月24日の祝日は開館、翌日休)
10月20日(土)、10月21日(日)
12月21日(金)～2019年1月6日(日)
2019年2月8日(金)、3月19日(火)

◇邸宅・庭園のみ公開

10月10日(水)～10月19日(金)
12月11日(火)～12月20日(木)
2019年1月8日(火)～2月7日(木)
3月20日(水)～3月31日(日)

◇詳しい展覧会情報は下記でご覧いただけます。
URL <http://www.e-kinenkan.com>



電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅
 - 西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅
- いずれも「川越駅～桶川駅」間の東武バスで
牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第55号

2018年9月 発行

編集発行 公益財団法人 遠山記念館

編集担当 久保木 彰一

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675

TEL 049-297-0007

FAX 049-297-6951